

文

化

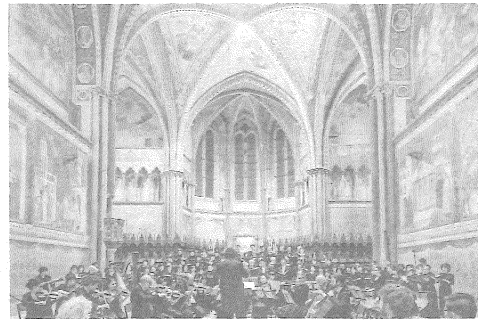
阪神大震災の犠牲者を合唱で追悼しようと始めた「レクイエム・プロジェクト」が今年で10年を迎えた。神戸から始めた活動だが、その後、沖縄、広島、長崎といった他地域に拡大。さらに東日本大震災の被災地にも合唱の輪を広げ、海外でも公演するようにになった。

阪神大震災が発生した1995年1月17日、私はぼつぜんテレビを見つめていた。見慣れたビルが倒壊し、街が燃えて

いる。大阪で生まれ、関西で作曲活動をしていて、4カ月前に拠点を東京に移したばかり。衝撃と同時に自分だけが難を逃れたという後ろめたい気持ちにさいなまれた。

◎ ♪ ◎

「ルミナリエ」契機に音楽に何ができるのか。突きつけられた命題だ。しかしまずはドラマ音楽の制作など眼前の仕事をごさすので精いっぱい。98年の長野



震災後15年たった10年に被災者を中心とした合唱団で歌おうと考えた。合唱団は08年に発足した。震災の年に生まれた中学生から80代まで65人が集まった。その年の夏から始めた月2回の練習では自己紹介とともに、負担にならない範囲で震災体験を話してもらった。

2016年にはローマ法王に作品を献呈した(イタリア・アッシジの聖フランチェスコ聖堂)



完成した合唱組曲「レクイエム」あの日、あなたを忘れない」は最後を朗らかな歌詞と曲調で締めくくった。10年1月17日の初演で、団員たちが見舞われた東北でも「歌

10周年を迎え記念公演海外公演も実現した。12年にはチェコ・プラハで東日本大震災の追悼公

演を開いた。14年のオーケストラのウィーン・聖シュテファン大聖堂での演奏には仙台フィルハーモニー管弦楽団の有志らを含め158人が参加。終演後の拍手は10分以上やまなかった。16年にはバチカン市国のサンピエトロ大聖堂などで歌い、

鎮魂歌 神戸から世界へ

◆震災犠牲者を追悼 合唱の輪を東北や海外にも◆

上田 益

震災から10年の節目を迎えた2005年1月17日、ルミナリエの音楽演奏で縁を結んだ音楽家らの協力を得て神戸で追悼

コンサートを開いた。10年を境に、震災の記憶が風化していく危機があった。腹をくくり「最低10年は続ける」と会場で宣言。レクイエムを作曲し、

にも「生き残った私たちは、未来に向かって懸命に生きて行こう」という前向きなメッセージを込めようと決意した。

た。被災者である団員の思いを受け止め、曲に反映したかったからだ。印象深かったのが、被害が少なかった人の多くが「申し訳ない」という気持ちを抱えていたことだ。私が書くレクイエムには、追悼の気持ちとともに

ちが明るい表情で歌ってくれたのが忘れられない。詞は全てラテン語。日本語の詞では被災者にとつて重たくなり過ぎるの理由もあるが、時間や空間を飛び越えた言語を通し、海外にも伝えたいと考えた。

◎ ♪ ◎

活動継続へ各地で練習初演後も、団員の大半が活動継続を望んだ。続けるのなら、その思いを広げていきたい。私の実家である高野山の成福院には丸木位里・俊夫妻が共作した有名な「原爆の図」の2作品があった。

それを覚えて育ったため、平和への思いは強かった。かつて太平洋戦争で大きな犠牲を払った地域の音楽家にも協力してもらい、各地で練習する体制を整えた。合唱指導や伴奏で協力してくれる人たちも現れ、その年のうちに沖縄や大空襲に見舞われた東京、09年に洪水被害を受けた兵庫県佐用町でコンサートを開いた。

11年に東日本大震災に見舞われた東北でも「歌

いたい」と言ってくれる人がたくさんいた。福島や岩手、仙台などでも歌うようになり、地元の詩人と共に合唱曲を作るようになった。福島では和合亮一さんと「黙礼」、岩手では宇部京子さんとの共作で「三陸鉄道が行く」が生まれた。

コンサートでは他地域の人を手弁当で参加してくれる。抱える苦しみやつらさは異なるが、皆で分かち合う交流が生まれた。現在も全国7カ所で行き続けている。

◎ ♪ ◎

10周年を迎え記念公演海外公演も実現した。12年にはチェコ・プラハで東日本大震災の追悼公

演を開いた。14年のオーケストラのウィーン・聖シュテファン大聖堂での演奏には仙台フィルハーモニー管弦楽団の有志らを含め158人が参加。終演後の拍手は10分以上やまなかった。16年にはバチカン市国のサンピエトロ大聖堂などで歌い、